

名詞文のプロトタイプとしてのウナギ文, 及び体言締め文

## The *Unagi*-Sentence as the Prototype of Japanese Nominal Sentences, and Noun-Concluding Construction Sentences

谷 守 正 寛

TANIMORI, Masahiro

### 要旨

本稿では、いわゆるウナギ文と呼ばれる名詞文及び体言締め文をめぐって、稿者のこれまでの論考からさらに、ウナギ文における「は」と文末に来る名詞「ウナギ」との関係について独自の視点から考察を発展させながら、日本語の名詞文におけるウナギ文の位置づけを検討する。実際、日本語母語話者は学術的には未解決のこうしたタイプの文であっても、何ら文生成上の複雑な過程を経ることなく使用していると言える。にもかかわらず、長年にわたってその構造について解明されていない感がある。

従って、稿者は一つの視点から検討を行い、もっともシンプルな原理を求める方向で、統一的な分析によって「は」が把握されるべきであると考え、日本語の名詞文に共通する側面を、文末名詞文（体言締め文）との比較を通して指摘する。措定文をはじめ雑多な文とされるものを含め、諸々の日本語名詞文を観察しながら、ウナギ文が日本語名詞文のプロトタイプであることを提案する。そして、これは一つのパラダイム・シフトとなろう。

【キーワード】 「は」、ウナギ文、名詞文、文末名詞文、体言締め文

### Abstract

In this paper, the author provides unique insights into the so-called "*unagi*-sentence," and its relation to nominal sentences and noun-concluding construction sentences. Consideration has been advanced in an original direction about the relation of *wa* with the sentence-final noun *unagi* in the *unagi*-sentence and the position of the *unagi*-sentence in Japanese nominal sentences has been examined. In fact, it may be said that native speakers of Japanese are using this academically unsolved type of sentence, without passing through a complicated process of

sentence creation at all. However, there is finally a sense of its elucidation being unprovided for years. Thus, the author has continued the examination from a single angle and considers that *wa* should be systematically grasped through a unified analysis for the purpose of discussing the simplest principle. In this paper, a similarity among all the types of Japanese nominal sentences has been pointed out through comparison with noun-concluding construction sentence. This paper also proposes that the *unagi*-sentence is the prototype of Japanese nominal sentences, after taking a survey of all Japanese nominal sentences. This consideration will bring a distinct paradigm shift

Keywords : *wa*, *unagi*-sentence, nominal sentence, noun-concluding construction sentence

## 1. はじめに

本稿では、「ボクハ ウナギダ」という文について考察をすすめて、「ハ」と文末で「ダ」が受ける名詞「ウナギ」との関係について独自の方向で考察を進め、さらに、ウナギ文を、体言締め文に対して連続的、統一的に捉える視点を設定する作業を行いたい。なお便宜上、「ボクハ ウナギダ」といったタイプの文を「ウナギ文」と呼ぶことにする。また、とりあえず、文末の「ダ」で受ける「ウナギ」といった名詞を「文末名詞」と呼び、後で別称も使う。

西山(2003)でも、ウナギ文について、これをどう扱うかをめぐって多くの提案がなされたものの、いまだ定説を得るに至っていないと指摘されているように、ウナギ文が提唱されて以来、相当の長い期間放置すらされている感がある。

本稿では、長い間この文の解明が定まらないというのは、おそらく想定外なところに原因があるからではないか、なぜ未だに合理的に都合良く説明できないのかといったことについて、これまでの稿者の論考を元に、改めて考察を一步進め、先行する諸研究とは異なる視点から、そうした課題を克服する方向を模索しつつ提案する。

ウナギ文については、例えば、料理店などでメニューを見ながら話すように、「僕は鰻が食べたい」とか「僕は鰻を注文する」とかの意味だと、奥津(1978)は述べている。そして、そこではもっぱら文末の「ダ」をめぐって論じられている。

例えば、次のようにである(下線は筆者による、以下同様)。

- |     |           |      |                     |
|-----|-----------|------|---------------------|
| (1) | a. ボクハ    | ウナギ  | <u>ダ</u>            |
|     | b. ボクハ    | ウナギ  | <u>ヲ</u> <u>食ベル</u> |
|     | c. ボクハ    | ウナギ  | <u>ヲ</u> <u>釣ル</u>  |
| (2) | a. クラーク君ハ | シドニー | <u>ダ</u>            |

- b. クラーク君ハ シドニー カラ 来タ  
 c. クラーク君ハ シドニー ニ 居ル  
 d. クラーク君ハ シドニー デ 生マレタ  
 (3) a. ボクハ ナイフトフォーク ダ  
 b. ボクハ ナイフトフォーク デ 食ベル

このような文を観察して、「ダ」が助詞をも含み得る様々な述語の用言部（下線部）を代用するという、いわゆる述語代用説を唱えた。(1)では、「ダ」が「食ベル」や「釣ル」、(2)と(3)では、「カラ 来タ」とか「デ 食ベル」といった「助詞+動詞」のセットの代わりとして「ダ」が使われる、とされたわけである。

北原(1981)では次のように、元の文である(4a)から(4e)へと文が変成されたという。

- (4) a. ぼくは                      ウナギが              食べたい。  
 b. ぼくが食べたいのは      ウナギ              だ  
 c. ぼくのは                   ウナギ              だ  
 d. ぼくのは                   ウナギ              だ  
 e. ぼくは                      ウナギ              だ

西山(2003)では、次の表意を立て、 $\phi$ は「注文料理」「注文する／欲しい」等が入りうる変項だとするが、これも $\phi$ が「僕が注文する料理」「僕が注文する／欲しい」等を代替するという意味合いではやや代用説的な側面があるともみなせる。

- (5) ぼくは、 $\phi$  (の) は ウナギだ。

本稿では、上のような在り方で「ダ」に関連づけて論じるのではなく、あくまで「ボクハ」の「ハ」をめぐって、母語話者が何ら煩瑣なプロセスを経ずに使用していると予想されるもっともシンプルな原理を論じることを目的とし、またそうすることが、この単純な文構造の説明には必要ではないかと考えている。「ハ」をより統一的に捉えていくことを通じて、外見上はウナギ文と違って連体修飾節<sup>1</sup>を常に持つという点からして構文が異なる体言締め文における文末名詞の在り方にもふれ、両者の文末名詞の共通性を見出し、日本語の名詞文全体について鳥瞰する。そして、ウナギ文が日本語名詞文のプロトタイプであろうと提案する。

## 2. ウナギ文をめぐって

数十年の長きにわたって、この単純な文の本質的構造の解明が実現しないのはどういふことだろうか。母語話者にとって納得されるような原理が定まらず埒が明かないというのは不思議でもあろう。名詞文の枠組みに何らかの組み替えがあつてよいだろうと思う。

ウナギ文の「ダ」は必須ではなく省略できようから、除外して「ボク・ハ・ウナギ」と言えば、わずか三語で成り立つ。同じ三語で成る「ボク・ト・ウナギ」といった句や、二語増やした文「ボク・ハ・ウナギ・ヲ・食ベル」のような文をめぐって、難解な議論の余

地が残り、根本的なところで決着できないままであり続けるといった謎は見出し難い。では、すっきりと解き切れない原因がどこにありそうかを、改めてよく観察し、吟味してみよう。すると、「ボク」「ハ」「ウナギ」の三語のうち深淵な機能を孕んでいそうなものとしては、「ボク」でもなく「ウナギ」でもなくそれらを結びつける「ハ」しか見当たらないように思われる。

ウナギ文を解く方向に導くきっかけとして考えられるものは、「ハ」に常に付きまとうと思われる「論理的格関係」という呪縛のようなものではないだろうか。つまり、残された解決の道は、「ハ」から論理的格関係という堅固な枠組みを解除することではないかと考えている。

その点について吟味する。上の(1)～(5)における解析ではいずれも、「ハ」について、実は、基本的にガ格という論理的格関係を持たせて、「僕が食べる」、「僕が食べたいのは」、「僕が注文するのは」といった表現を駆使しながら、文末名詞と論理的な繋がりを成立させ、筋道を通させるように理論を設計している、とみえる。こうした考察と分析について共通して言えることは、「ハ」が常に論理的格関係を有していなければならない、とみなしていることではないだろうか。「ハ」は格助詞の中でも特にガ格の性質を有しているという前提となる既成の堅固な観念が厳然とあるように思われる。

より具体的に言えば、(1)の「ボクハー食ベル」において「ボクがー食べる」というふうには、ガ格で表しうる「僕」の動作主体としての立場を前提として設置し、理論展開がなされている。(4b)の「僕がー食べたいのは ウナギだ」においても、文変成の出発点の段階で「僕がー食べたい」というふうには、やはり、ガ格(主格)で表しうる「僕」の「食べる」という動作の主体としての立場を前提としている。こうした「僕が～する／～したい」ではガ格表示の「僕」が、最終的にウナギ文の主題「ボク」に帰しているのである。(5)においても、「僕が注文するのがウナギであること」、「僕の注文料理がウナギであること」が出发点となっており、ガ格(又はノ格)の格関係の連結機能を有しつつ「ガ(又はノ格)」に起因する「ハ」とみなして、分析を進めている。従前の分析では、「ウナギ」に対して「食べる」「注文する」といった「ボク」という身体を通じて、外界にあるウナギという食べ物に対して物理的に行う行為を司る身体的主体としてしか、「ボク」を捉えていない。

だからこそ、「食べる」や「注文する」といった物理的行為の対象となりうる外界の物的対象「ウナギ」のみを考察の対象としており、それに対するそういった外界で働く物理的動作を表す動詞のみを、必ずと言っていいほど、ウナギ文が生成されるに至る元の文に設置するなどして、そこから様々な手順でもって、ウナギ文へと導こうと試みたのであろう。

このようなわけで、ウナギ文をめぐっては、これまでの言説とは異なる視点から、考察の焦点を、「ボク」と「ウナギ」の間に論理的格関係を設置することによるのではなく、そういった介し方ではないところの「ハ」の働きの本質に注意を向けるというパラダイ

ム・シフトが必要だろうと考えている。

文頭の語（主題）に「ハ」が設定されていて、文末に名詞が来ると、次のように、話者はどうしても、自ずと「ハ」にガ格を重ねて読み取ってしまうだろう。

(6) 私は幹事だ。

措定文「AはBだ」とは、「Aで指示される指示対象について、Bで表示する属性を帰す。」（西山(2003)）とされる。(6)の「私」については、「幹事」という属性を帰す、すなわち、「属性」とは「そのものに備わっている固有の性質・特徴」（『大辞林』）であるから、「私」は幹事である主体（属性の持ち主）を表す、或いは、「私が幹事であること」を含んでいる。「私」と「幹事」という語の意味の間にある関係を考えれば、「私が幹事」なのだから、自然とそうなるのだろう。このような場合に「私が幹事だ」の「私が」を主題化した「私は」が、すなわちガ格の論理的関係を有しているということにもなる。

次は文の型式としては、外見上(6)と同じである。

(7) 私は彼だ。

この場合、彼は私の属性ではなく、「私」は主語として彼という人間であることを表すことにはならない。「私」と「彼」の間にある意味的關係を考えれば、「私≠彼」だから、「私が彼であること」という属性の主体（持ち主）にはなりえず、措定文ではなくなる。このようにガ格の意識が介在し得ないために、このタイプの文は即座に雑多な扱いを受ける羽目に陥る。逆にガ格の意識が介すれば、容易に堅固な名詞文としての地位が与えられることになる。

(7)が言えるのはウナギ文の場合で、ある状況の中で設定された選択肢として指せば言えるが、唐突に別種の雑多な名詞文とされるわけである。

(8) A：この仕事を頼むのは誰がいいと思う？僕は彼女なんだけど。

B：僕は彼だな。

繰り返すが、稿者は、(6)のように、論理的格関係（特にガ格）をもって文末名詞へと繋げようとする「ハ」の呪縛のようなものを取り払いたいと考えている。それは様々なタイプの「ハ」に一貫した統一的な原理で説明できるように、その本質を探究するためであるが、ガ格等の論理的意味関係によって、外界の「ウナギ」へと繋がる同じく外界で働く行為を表すか含意する動詞（「注文する」「食べる」等）や形容詞等と、文末の述語に先行する名詞句（「ウナギ」に先行する「欲しいの」「注文料理」）等に対して論理的に付く「僕」の格を設定することからは、ひとまず離れ、「ハ」について、もっともシンプルに説明できる原理へと統一化する方向で考察することになっている。ここでウナギ文をまったく奇妙なものではなく、ごく自然な名詞文とみなす稿者の考察は従来にない独自のものとなろう。

奥津(1978)では、ウナギ文の場合、「ボク」と「ウナギ」とが(9)のような同一判断または包摂判断にあるとは言えないとみなし、ウナギ文の奇妙さを強調した。そういったことから、「ダ」が様々な述語を代用するという方向に解決の糸口を求めたわけであろう。

## (9) ボク⇔ウナギ

改めて考えると、やはり、それはウナギを生き物の鰻（又は料理）としか見なしていないからであって、そのようなことがあるとしたら、僕という人間が鰻という生き物（又は料理）であったり、僕という人間の属性に鰻（又は料理）の性質が含まれるといった包摂関係にあるという意味になるので、このような前提でウナギ文を眺めれば、ウナギ文が奇妙に映るとともに、文構造の定説が定まらなくなるだろう。

この点について、谷守(2006, 2014)でも少しくふれたが、「ウナギ」は生き物（又は料理）でなく私の意志決定の対象として、外界にはなく脳内にある抽象的な選択枝（価値観のようなもの）にすぎず、この文での「ボク」は僕という生身の身体としての私を指してはいないと考える。「ボク」と「ウナギ」の関係を物的な意味で同じ土俵に置いて、同一か包摂関係にあるかで見ようとするのがウナギ文が説明困難なものになった所以だろう。

谷守(2006)では、「ボク」は「ウナギ」に対して何か動作を働きかける（「食べる」、「注文する」など）身体的物的存在である「僕」ではなく、「ウナギ」という選択枝を選ぶ意志の枠組みとしての「ボク」だとすれば、それが文が展開される「舞台」となり、そこに発生する意志の対象としての「ウナギ」を展開させることができる、と考えた。「食べる」「注文する」こととは、外界における物的作用・変化を表象したもので、それには囚われずに、脳内でのみ主題と文末名詞とを直結、関係付けるだけでよいのである。

谷守(2014)では、その「舞台」を「主題ネットワーク」という概念で設定し、そこに展開され述部に抽出されるのを待ち、主題とは論理的格関係を持たない（そして、結果的には持っているともみなされる場合が多い）ものを「要素情報」とした。要素情報とは、話者が主題についてもっとも引っ張り出して述べたい時に抽出して連結させるだけで名詞文を完結することができるものである。谷守(2014)でも「春は曙」について関連づけて言及したが、それと構造は同じものであるという立場である。

本稿では、ウナギ文をまず考察の対象とし、筆者のこれまでの考察を元に改めて「ハ」の本質に少しく迫り、個別の特異なタイプに見える名詞文毎に主題文を細分化する方向にではなく、よりシンプルにとらえる統一化の方向で論を構築していく。

ウナギ文をめぐって「ハ」を考察する中で、同じ名詞文の型式をとる「体言締め文」についても再度統一的な原理で説明できることを吟味、確認し、ウナギ文の「ハ」と連続的に体言締め文の「ハ」との共通性を論じることにした。

### 3. 「AはBだ」名詞文におけるウナギ文の位置づけ

三上(1953)では、

措定－無格－第一準詞文

イナゴハ害虫ダ

犬ハ動物ダ

東京ハ日本ノ首都デア

私ハ幹事デス

## 指定－有格－第二準詞文

君ノ帽子ハドレデス？                    幹事ハ私デス  
 昨日到着シタノハ扁理ダ                花園ヲ荒ラスノハ誰ダ？

## 端折り－第三準詞文

姉サンハドコダ？                        姉サンハ台所デス  
 明日カラ学校ダ                            僕ハ紅茶ダ（注文の場合）  
 私ハ左派社会党ダ（投票の場合）

と区別した（pp.43-p.45, 例文を一部省略）。ウナギ文は上の「端折り－第三準詞文」に当たり、当時から別仕立てで挙げられていたことになる。また、措定、指定文については、

- 一、私ハ幹事デス（内容に立入る措定、包摂判断）
- 二、私ガ幹事デス（内容に立入らぬ identification）
- 三、幹事ハ私デス（指定、述部は有格）

としても区別した。三上(1975)では「包摂判断の方はそれきりだが、identificationの方は翻して幹事ハ私デスとすることができる」とし、「私ハ幹事デス」と「私ガ幹事デス」の違いを指摘した。そして現在の知見では、西山(2003, 2014)によれば、「私」の属性を表す(10)のタイプが措定文、(11)のタイプが指定文とされるに至っている。

(10) 私は幹事だ。田中は会計だ。

(11) 私が幹事だ。

そこでは、(11)の意味を変えずに(13)のように、「BはAだ」と言えることで、(13)は措定文ではなく倒置指定文として区別される。ほかにも、倒置同定文、倒置同一性文が挙げられているがここでは省く。

(12) 幹事が私だ。会計が田中だ。

(13) 幹事は私だ。

稿者は、(10)と(13)のタイプは、対等な立場で相対立する名詞文としては立てなくてよいとする立場をとる。名詞文(13)の述部の名詞「私」が、その時にただ1人の幹事に当たる時に、翻して(11)になるということであり、対立的に別種のタイプとして設置するほどに異質なものではない。倒置指定文とされるのは、次のような偶然の場合である。

(14) (1人で当たる本会の) 幹事は私だ。(←私が(1人で当たる本会の) 幹事だ。)

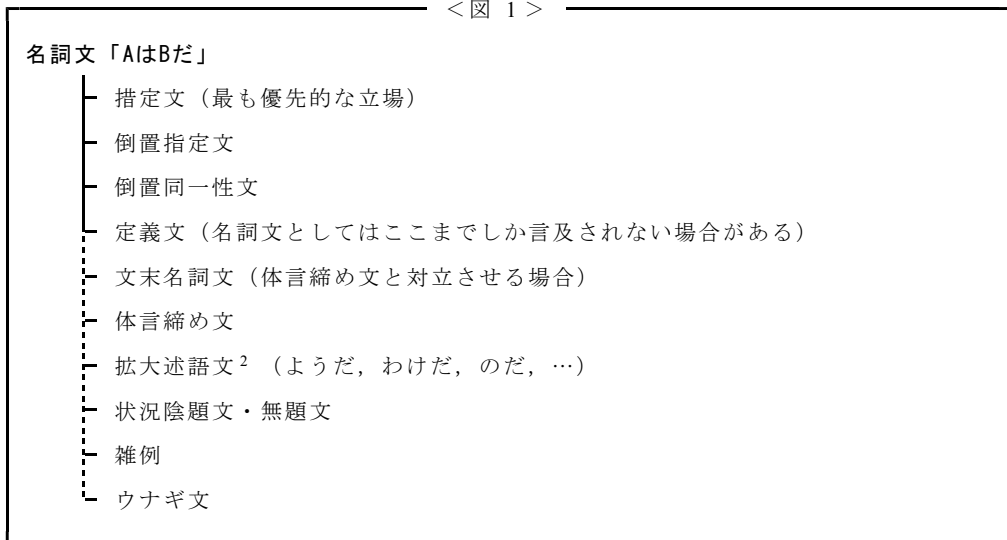
三上(1953)においても、「解説に使った名詞がたまたま唯一物であるためにそういう結果になるので、性質上解説であり包摂判断であることには変りがあるまい」(p.134)という言説がみられるが、本稿の考察と部分的に符合すると考える。まさしく(13)の解説部分「私」がたまたま1人しかいない幹事であるために、(11)のように翻しても同じ意味を表すのであって、(13)も包摂判断的であることには変わりがない。そのような場合があるから措定文とされる(10)でも翻して(12)のように言えることになるのである。

包摂判断は、例えば、百までの正の偶数  $N\{2,4,6,\dots,100\}$  における要素  $a$  が「 $a \in N$ 」で表されるように、構成要素を導き出すものである。そのように、幹事である人物の集合が

ら「私」(或いは「太郎」も)が出てくる。要素がたまたま1つであれば翻して言い換えられることは上に見た。ウナギ文では、「ウナギ」という集合体に「ボク」はそもそも含まれない。「ウナギ」は「ボク」という集合を成す構成要素でもない点で、別格であり格上である。

その上で、「AはBだ」という名詞文は、Bに連体修飾節が任意で、或いは必須で前接するものも含め、名詞文の種類を増やすならば図1のように細分されていくだろう。現状では、佐藤(2016)によれば、「名詞文には、質や特性など、物の特徴を表現する特徴づけ文(措定文)のほかに、主語と述語にさしだされる物が同一であることをあらわす同定文(指定文・一致認定文とも)がある」とした上で、措定文を第一に据え置き、次に指定文と続くものとしており、本稿にとっては肝心のウナギ文は「特殊な構造的なタイプに属する二次的な名詞文である」と格下げされている。雑例と同様、図中のように雑多な番外地に置き去りにされることになるのだろう。

< 図 1 >



そこで、措定文と同じ横並びの立ち位置で倒置指定文を立てるよりは、措定文の下位に分類されるような資格を充てるのが適当だろう。稿者は、(13)において「幹事は」と言えば、「私」が必ず来なくてもよいと考える。「幹事は」と言えば、後の「～だ」に対して主格の論理関係でもって繋がっていくと限らなくてよい。日本語の名詞文を生成する際には主格を常に意識する必要はない。この見方は、三上(1953)の「包摂判断、措定の主題は無格である」(p.135)という知見や、以下のように明言していることと通ずる面がある。主題の「全体」に内属する部面とは要素情報であり、主題から係るのでもない。

名詞文の主題はいわば自己中心的な無格の主体であって、それぞれの性質を持った部分や部面がそれへ帰属し、内属するというおもむきがある。…主題の「全体」は下の用言に対して自分の方から主格として係っていく必要もなければ、余地もない。(p.139)

三上(1953)は、措定文と指定文についてその違いを指摘し、第一準詞文と第二準詞文

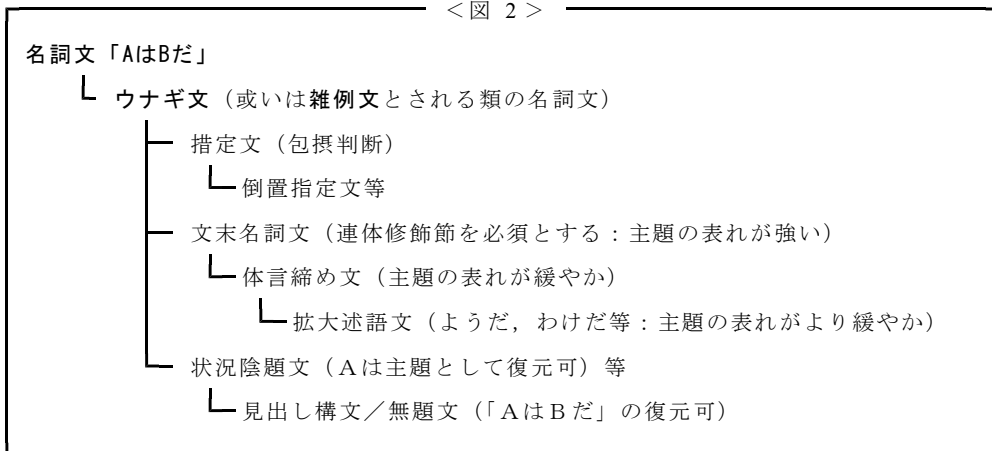


としたものの、「指定文も包摂判断に変わりがない」とする言説からみても、両者を対立的・並列的に名詞文を分類したわけではないだろう。以後の諸研究において詳細に考察されたように、形式的には単純に見える名詞文の「意味構造」は、そこに来る名詞のタイプ、意味等によって、それなりの複雑さを醸し出すものであることは判明したが、名詞文の構造たらしめる「成立過程」までもが別々でなければならないということではない。

そこで、図1のように名詞文を並列的に細分化していく方向ではなく、名詞文の出発点となるプロトタイプにウナギ文を据え、図2のような配置で名詞文を捉えたい。

三上(1953)はウナギ文を第三準詞文として別仕立てに立てたことから、ウナギ文を第一に捉える意図ではなかったことが窺えるのに対して、本稿の提案では、図2が示すように、ウナギ文(或いは雑例)を名詞文のもっとも核心の位置に据えている。措定文と倒置指定文等とは同列の立ち位置には置かずさらに下位に分類している。敢えて言えば、ウナギ文をもって日本語本来の名詞文が存立し、下位のタイプはむしろその派生的なものであるという意味合いである。さらに言えば、名詞文における主題と文末名詞との論理関係は、語彙間の意味関係から後付けされたものとみてよいという考えでもある。

< 図 2 >



論理学では、「 $A \in B$  (AはBだ)」における包摂判断を、1つの集合とその要素(元)との間にある帰属の関係を表すものとして、もっとも基本的とされる。「AはBの元だ ( $A \in B$ )」を第一とし、「AはBの部分集合だ ( $A \subset B$ )」, 「AはBと同一だ ( $A = B$ )」という具合に下位に続く。こうした事情を受けて  $A \in B$  と等価とみなされた措定文が第一に据えられたのかもしれない。

数式の読みにおける意味との差異については後述するが、こうした名詞文と一見は同等に見える論理学のいう第一の基本  $\{A \in B\}$  と、日本語の名詞文  $\{AはBだ\}$  の本質とは等価とはみなさず、区別すべきと考える。その上で、日本語の名詞文とは本質的に、現在第一に考えられている措定文よりもウナギ文が先行する、と提案するのである。

図1のように、措定文といった種々の派生的な名詞文を並列的に分類することで、語感的に違和感なく言えるウナギ文や雑例とされる文が、措定文の論理から出発すると、整合

性を持たせるには説明困難に陥るような番外地に追いやられて置き去りにされたと言えることができる。

例えば、外国人向けの日本語初級教科書において、次のようなウナギ文が初期段階から措定文や指定文に混ぜて扱われる。副本の解説書には、これを存在場所を表すとして、{you can state where a place, thing or person is} とある。

(15) 山田さんはどこですか。

……会議室です。

(『みんなの日本語初級 I 第2版本冊』第3課, p.24, スリーエーネットワークより)

つまり、ウナギ文は学術上は二次的なもの扱いにされながらも、初級段階の日本語においてはすでに、実生活上では有用で教えるべきタイプとして優先的に指導項目として扱われている、或いは避けて通れないために扱わなければならない名詞文とみなされている。学術的には二次的なものを初級学習者に教える理由を考えるならば、それはウナギ文が「まものの日本語」だからである。ただし、(15)は存在場所のみを示すので用法の提示は限定的ではある。副本には、{The telephone is on the second floor.} とか {Mr. Yamada is in his office.} といった翻訳が付いているものの、on や in が is と共起するために、通常の名詞文とは異なるという説明が欠けている点で、西欧語話者には親切ではない。

名詞文において、主題に係る文末名詞に対する制約が最も緩やかなウナギ文が「まものの文」として古来より存在する以上、従前より名詞文の主役である措定文の「属性を表す」という性格は、実は、名詞文の定義付けとしてはむしろ制約的なものであり、それが西欧語におけるように、真っ先に優位な立場で立ち塞がり陣取ることによって、ウナギ文が名詞文の枠組みに収まりきらなくなった、とみている。

#### 4. ウナギ文の「ハ」の無格の在り様

ウナギ文について、最新の論考でも「名詞文ではあるが、これをいかなる構文とみなすかは議論の余地がある」(西山(2014))、さらに、前掲したが「特殊な構造的なタイプに属する二次的な名詞文である」(佐藤(2014))とされている。繰り返すが、三上(1953)の考えに従っても、倒置指定文のBがたまたま唯一の物Aであるために、指定文と同じ意味を表すという結果になるわけであって、倒置指定文においてもBはその性質上解説であり、包摂判断を下したものに変わりはない、ということをも確認し、前節で、日本語の名詞文とは基本的にウナギ文であると提案した。

ウナギ文には明らかに、「ボク」「ハ」「ウナギ」という形式しか存在しない。{僕≠ウナギ}である以上、格関係以外の何らかの説明が必要である。あくまで主格を充てた「僕が」を使って、ウナギ文の元の文を想定し、そこから論理が通るような筋道を構築しつつウナギ文に至らせるというところに無理が生じている感がある。実証的にみても、ウナギ文は「ハ」で主題と文末の名詞を直結させていることのみが形式上の事実なのであるか

ら、「ハ」に解決の糸口を見出すのが必然的な帰結であろう。

定説が長きにわたって打ち立てられない状況を打破すべく、構造的に極めて単純であるにもかかわらず解明されそうもないウナギ文こそが、「二次的な存在」などではなく、むしろ、もっとも本質的でプロトタイプな名詞文であるという資格を与えるべきものだと考えるに至った。堅固に確立され議論の余地がないとされる措定文と後述する体言締め文は、名詞文のプロトタイプであるウナギ文から派生的に生まれ得る下位分類的なタイプになる。これまでの考察を引き継いで、ウナギ文を皮切りに統一化の方向で日本語の名詞文を都合良く説明できる原理を構築したいと思う。

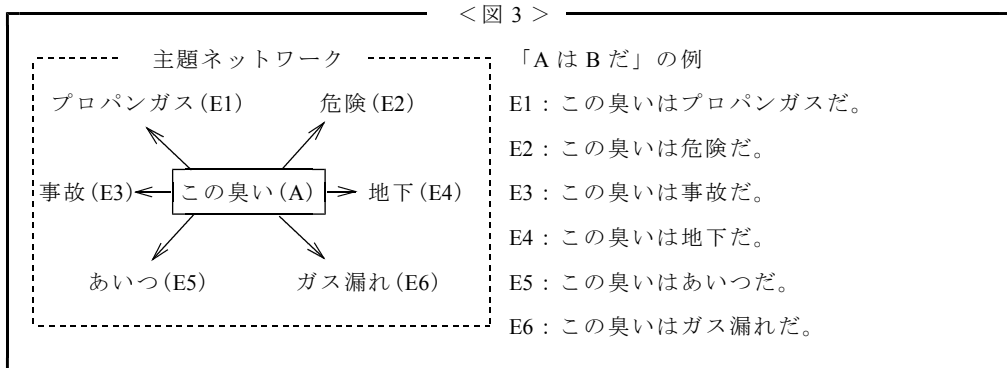
名詞文に様々なタイプの名詞が表れるのは当然であって、その振る舞いによって表れる意味構造の違いが見出される度に、「成立過程」が別々に独立すると考えることは非合理的であり、言葉の在り様としては不経済である。先行諸研究の指摘した微妙な違いは、それとして貴重であり、どのように名詞文を使っているかが詳細に説明できるものとして有益であるが、成立原理としてはあくまで単純であらねばならないと考える立場である。

なぜ「AはBだ」におけるBがAの「属性を表す」とされる措定文が、現在では名詞文における最初の地位を与えられたのだろうか。おそらくBが属性を表すということから、Aがその属性の持ち主であること、Aが属性の主体（持ち主）であり、「AがBという属性を持っている」というふうに、多くの話者が主格を意識させられることと、主格がもっとも強力な格であり、それを使って論理的に説明がしやすくもっとも説得力があるように映るからではないだろうか。ところが、ウナギ文ではそうはいかない。格を使つての論理的な説明が困難である。論理的な手順を持ってなんとか合理的に説明しようとする、遠回りで煩瑣なプロセスが介せられる。そして肝心の母語話者にとって何の問題もなからう自然な文が、二次的で雑多なものとして追いやられるという憂き目を見ることになっている。

主格でもって説明できる文の成立過程が確立される（とみえる）措定文が、最強の立ち位置にあり、真逆の立場にあるウナギ文が二次的で雑多なものとして番外地に残されてきたところに問題の根源があるとみれば、その経緯と現状が理解しやすくなる。先ずはここまで、三上(1953)の言説の一部でもあるところの、名詞文の主題は無格の主体であり、主題は下の用言に対して主格として係っていく必要がないという知見も援用しつつ、考察を進めた。主題に部面が内属するという言説は、本稿の主張に通ずるのである。

次に、稿者は、谷守(2006, 2014)において、ウナギ文を、三上(1960)のいう主題文「XハYガZ」文の「雑例」と同じ扱いにされるタイプとみなした。文末名詞に相当する語をTanimori(1994)の「saucer」から、谷守(2014)においては「受皿語」と呼び、主題として「は」によって括り出され、受皿語がそこから抽出される情報網を「主題ネットワーク」と呼んだ。受皿語は連体修飾節を伴わなくてもよい点で先行研究で言う文末名詞とは異なるが、それもカバーする広い概念で捉えて適宜使用する。受皿語に置かれる元の小情報は「要素情報」とした。

主題が「は」(以降「ハ」を「は」とする)で立てられると、それに関連する様々な情報源(記憶・感覚情報等)が要素情報として、脳内において(脳科学的な生物学的・化学的構造の言述はここではともかく)主題ネットワークの範囲が截然と決められる必要はないものの、ある程度枠が定まる。その中で、話者がその時にその場でもっとも抽出したい、もっとも述べたい要素情報をそこから取り出して、事前に論理的格関係がトリガーになることなく、形式上上述部に結び付けるだけのことである、とした。この文生成プロセスの試案では、「は」から、それに嵌め込まなければならない論理的格関係という堅固な枠組みを解除できるというメリットがある。「AはBだ」におけるAにBを形式的には「は」で結び付けるだけで、格に縛られず日本語本来と稿者が考える名詞文を作ることができると提案するのである。

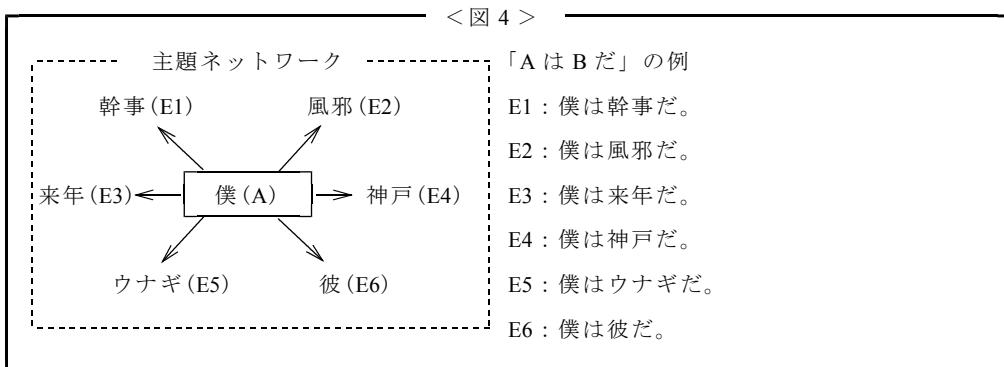


ウナギ文と雑例を比較するために、次の名詞文を吟味してみよう。

(16) この臭いはガス漏れだ。

(17) 僕は彼だ。

要素情報をEで表し、図中の矢印は、話者の脳内の主題ネットワーク内で、雑例タイプ(16)が図3、ウナギ文のタイプとされる(17)が図4のような在り方で、論理的格関係が介する動詞等が表れることなく、主題Aと要素情報Eとが結び付けられることを示したものである。右の例文は、各Eとそれを受皿語Bに置いて形成した名詞文である。(16)は図3のE6、(17)は図4のE6である。こうして、雑例文の主題「この臭い」とウナギ文の「僕」が同じ手順で受皿語を抽出させているとした。

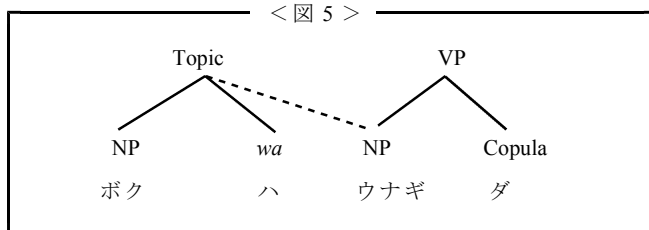


このようなわけで、十分に日本語らしい名詞文であるウナギ文の原理の下に、措定文等を設置すればよいだろう。名詞述部が属性を表すという限定的な規定の優先が西欧語においては確立されているとしても、それが、それに収まりきらないところの西欧語には存在しないウナギ文の規定を曖昧にせざるを得ない状況を生んだとみる。

「山田さんは会議室です。」といった平凡そうな文は問題視されないが、これもウナギ文であった。「山田さん」という主題ネットワークが意識されるや否や、思い出した記憶の情報を探って取り込まれた「会議室」という要素情報を抽出して、シンプルに名詞文を完成するという手順があるだけで、ウナギ文の文生成プロセスと同じである。このように見てくると、ウナギ文の主題を翻して「ウナギハボクダ」と言っても、一向に差し支えないことが上手く説明できよう。つまり、メニューを見てウナギに気づいて、それを主題に設定するや否や、ウナギに関わる要素情報の中に、いつもウナギを食べるこのボクが含み込まれ、ウナギとボクがすぐさま直結されるだけで出来る文なのである。

谷守(2006)では、「この臭いはガス漏れだ」とは、「この臭い」を言語情報としてではなく嗅覚による感覚情報としてとらえた話者の脳内で言語化されつつ主題ネットワークを形成し、そこに要素情報の1つとして「ガス漏れ」という語を生起させ、それを「この臭い」をめぐってもっとも述べたいがために直結させたものであると提案した。「あ、あれは火事だ!」といった視覚感覚による視界そのものが言語化される主題が成立してくる場合でも同様である。感覚器官から得た情報でなく、すでに脳内に定着した知識(長期記憶)が情報源であってもよい。ウナギ文においては、「この臭い」に当たるものが「僕」であり(感覚情報でなく長期記憶情報から発したもの)、一時的な要素情報「ガス漏れ」に当たるものが同じく一時的に現出した「ウナギ」であるということで、図3、4で示すように、統一的に説明できると見るのである。「この臭い」が元になるような文中の論理的格関係を有する他成分に起因するものといった捉え方はせず、シンプルに言語形式に表れたもので賄うというだけでよく、すぐさま成り立ち得る名詞文だと見ている。

主題と受皿語とはリニア(linear)な繋がりではないが、敢えて樹形図のごとく示せば図5のように示し得る。「ウナギ」は主題に論理的格関係で後付けされるのではなく、あくまで主題を含む枠内に含まれていつつ、そこから抽出されなければならない。



## 5. 数式と日本語名詞文

「ソクラテスは人間だ。」では、言述以前にすでにソクラテスの中に人間という属性が含まれる。論理式 {ソクラテス $\subset$ 人間} における「人間」とは、人間という集合を成す各要素が人間という等質な存在であり人間しか指さない。先に見た「幹事は僕だ」と「僕は幹事だ」とでは、実は、どちらが包摂判断を表す文なのか同一文なのかははっきりしなくなるようである。「僕」の中にはソクラテスの人間という永続的性質とは違って、一時的だが「幹事」という属性が含まれるし、「(本会の) 幹事」の中にはやはり一時的だが「僕」という該当者(属性)が含まれる。集合をめぐる包摂判断という数学的捉え方で日本語を捉えようとするのは無理のある作業であろうと思われる。ウナギ文では「ウナギ」の中に要素のように「ボク」が含まれておらず、逆に「ボク」の中では「ウナギ」は食堂のメニューを見た際に臨時的にメニューとして脳内で結びつけられて発生し抽出される。そして論理式 {ボク=ウナギ} によって表すことはできない。ウナギ文は食堂を出ればふつつう言えない。これは数学式の表す真とは様相が異なる。次例を見られたい。

(18) a.  $1+1=2$

b. 1足す1は2だ。

数式(18a)の「=」は日本語で読む時は「は」と言う。しかし「=」に「は」と同じ資格はなさそうである。(18a)は日本語で(18b)と読めるが、先入観を持たずに数学的観念としての理解に限って言えば、厳密には差異があるものの(18a)は指定文に近い。そして日本語文(18b)は数式(18a)とは等価ではない。「1足す1」という主題ネットワークには、次のように瞬時に自在に要素情報を取り込み、主題と文末で連結できる名詞の文が表せるからである。

(19) 1足す1は足し算だ。

(20) 1足す1は整数だ。

つまり、「1足す1」を「は」で受けた日本語文は指定文ではなく包摂判断に当たろうが、ここではいずれであろうともその区別はあまり問題ではない。計算式であれば { $1+1$ } は「足し算」という右辺を {=} によっては結びつけられない。さらに言えば、数式であっても完全な指定文はない。(18a)の右辺は、{ $1+1=1\times 2$ } であってもよく、数値結果は同じでも言わんとする意味が異なり、形式上も明らかに違う。だから、(18a)のような数式は指定文のように、{1足す1が2であること} などと「が」を使って読む方がよい。このように、厳密には数式に「は」を使えないはずだが、「は」で読むことで、論理式の縛りを受ける格好となり、ウナギ文が弾き出されることになったとも言えよう。

前掲したが、三上(1953)は指定文について、「解説に使った名詞がたまたま唯一物であるためにそういう結果になるので、性質上解説であり包摂判断であることには変りがあるまい」とした。その上で稿者は、包摂判断とは、(19)や(20)のように、数式とは違って、解説に使った名詞句が唯一物を指すということは基本的にないと考え、何に言及するかと

いう点でも指定文との区別にはこだわらない。「は」で表現した次の各文が言わんとする文意は、{ } 内のようにそれぞれ数式にはない独自のニュアンスを有する。

- (21) 私は幹事だ。 {私は確かに今回、本会の幹事に当たっている}  
 (22) 私が(本会の)幹事だ。 {私こそが本会の幹事であることにまちがいない}  
 (23) (本会の)幹事は私だ。 {本会の幹事は少なくとも私は当たっているが、…}

三上(1953)では、(21)を「内容に立入る 指定、包摂判断」、(22)を「内容に立入らぬ identification」、(23)を「指定、述部は有格」としたが、(22)と(23)が同じ意味だとしつつも、(23)に倒置指定文という異なるラベルを貼るならば、それは図2のように下位分類してよいものだろう。(23)は「指定」であるようで、実は、(19)(20)でもみたが、(24)が示すように‘内容に立ち入る包摂判断’であってよい。従って、(22)と(23)を常に等価だとはみなくてもよい。

- (24) (本会の)幹事は私で(もう一人太郎もだし、とにかく[幹事は]面倒で、…)。

数式に話を戻すと、数式記号“=”と日本語名詞文における「は」は等価でないとするのが適切だろう。数式による名詞文の捉え方や合理的だとみなされる西欧語の名詞文の解釈を優先し、それに倣って日本語の名詞文を捉えようとすることで、もっとも根幹にあったはずのウナギ文が正当なまともの表現でないものとみなされ、置き去りにされたのだろう。主格の「が」以外に、数式や西欧語に同等のものとしては存在しない「は」が、日本語には存在する所以である。「春は曙」と共に古来よりそうであるが、安定的にかつ自在に発話できる日本語の名詞文(ウナギ文)を、近年になって二次的な名詞文に格下げする理由がほかに見当たらないように思われる。

## 6. 体言締め文の統語構造をめぐって

角田(1996)で示された体言締め文をめぐって、谷守(2014)においてその主題と文末名詞との関係について述べた考察を踏襲しつつ、いくつかの課題について吟味し、その位置づけについて改めて整理、提案したいと思う。

- (25) 太郎は明日、名古屋に行く予定だ。

この場合、主題と文末名詞との関係において、次のような構文を提案するものであった。

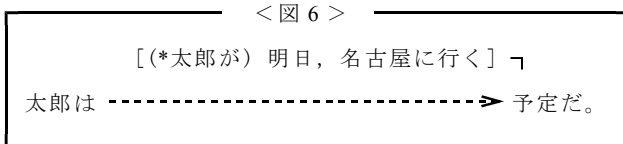
- (26) 太郎は[[明日、名古屋に行く]予定]だ。

「予定」とはどのような内容であるか、或いは「予定」を規定する要素には、その予定が帰属するところの「太郎」そのものを含めないということである。太郎について、どのような予定であるかという場合の「予定」の内容補充要素に「太郎」を入れてしまうと、ハウリングを起こすようなものである。これを便宜上「意味構造上のスパイラル」(Spiral of Semantic Structure)と呼ぶことにする。

どのような予定かということで、誰かの<予定>を組み立てる要素は、あくまでいつどこへ行くかということであって、その要素で組み込まれた「予定」が後に肝心の主題であ

る「太郎」に充てられる。それに先だって、{太郎が}を「予定」の補充要素に事前に組み入れたものを後でその「太郎」に充てることはできない。これが意味構造のスパイラルになるだろうからである。このことについては後に実証する。また、図5の統語構造をリニアな表示ではなく、Tanimori(1994)の手法で表せば図6の構図になる。図中の(\*太郎が)については図7のところで後述する。

特定の誰かの「予定」の構成要素には、事前には未だその特定の誰か自身は入り得ず、それらで構成された予定がどのようなものであるかが明らかにされた後に、それを執行することになる。主題の人物に充てられてはじめて、その人物はどういった予定を内包するのかが述べられる。従って、本稿の主張は、ただ連体修飾節内に主題が入らないからというだけで、{主題を含む文相当} + {名詞+だ} を文末名詞文と別に独立した構造とみるのではない。あくまで {主題+ (主題がなくてもよい連体修飾節) + 名詞+だ} を基本とみなしている。



さてここで、川島(2016)において指摘されているように、角田(1996)の言う {ガ/ノ交替} の不能によって、体言締め文の連体修飾節が通常とは異なり、節の部分が統語的に独立した動詞文であるとするべきかどうかを少しく吟味する。

(27) [[太郎 {が/ \* の} 明日, 名古屋に行く] 予定だ]。

この場合、「太郎」を「が」で表示しており主題とは別物である。これは、誰が行くのかを問われたような状況で、「太郎が-予定だ」と言う場合に起こりうる課題で、主題を中心に考察する場合とは別問題である。「太郎」を「が」で表示した場合、(26)の主題「太郎」が連体修飾節内に「下野」したことになるが、その上で、「が」と文末名詞との関係について、(28)のように、これまで提案してきた試案で示せば、新たな主題(下線部)が生起していることになる。

(28) (「いったい誰が明日, 名古屋に行く予定なんだ?」と聞かれて)

[実(のところ)は [太郎が明日, 名古屋に行く] 予定ですよ]。

この場合の「予定」は、取り立てて「誰が明日, 名古屋に行く予定だ?」と尋ねられたという新たな対話環境の構築によって発生した「実(のところ)は」といった主題ネットワーク内に取り込まれる要素情報となり、そこから抽出されて受皿語となる、つまり、{実(のところ)は-予定だ} という一貫したシンプルなシステムに基づく捉え方である。

その上で、さらに、{ガ/ノ交替} が起こらないのは、被修飾語の語彙としての意味・特性や、(29)のような {外の関係} では、「の」の所有に近い含意が欠落するためといった別の要因を考えてよいだろう。



- (29) a. [ 今日, 犯人 {が／\* の} 逮捕された ] ニュースの放送  
 b. [ 明日, 太郎 {が／\* の} 来ない ] 訳の説明

連体修飾節を受けた「予定」については、体言締め文でなくとも、(30)のように、(27)と同じく {ガ／ノ交替} は難しいだろう。{ガ／ノ交替} の可否をもって、(27)を統語的に別仕立ての構文として独立させる決め手にはならないと考える。

- (30) [[ 太郎 {が／\* の} 明日, 名古屋に行く ] 予定 ] の中身を確認した方がいい。

川島(2017)には、歴然とした違いがあるとする(31)(32)の例文を挙げて、体言締め文と文末名詞文の構文上の位置づけの区別を提案する非常に興味深い論考があるが、構文的には別仕立てせずに名詞文の種類を増やさない方向で捉えるためのシンプルな原理をもって、その位置づけの基本的な部分では統一化をはかるという本稿の論考をより深化させるには、むしろ有用なものであり、以下、それを別目的にはあるが援用しつつ考察を進めたい。

- (31) 太郎は子ども達の面倒を見る立場だ。

- (32) 太郎は来月会社を辞める見込みだ。

(31)では、「太郎」に関して「子ども達の面倒を見る」という広義属性を述べており、その属性の持ち主が主題である「太郎」となることは認めている。少なくともその点では本稿の構文上の捉え方と符合することは、後で再度ふれるが注目すべきことである。ただし、太郎が属性の持ち主であるとする措定文という解釈については、上述したように、(31)とウナギ文との共通性を主張する稿者とは解釈が異なる。つまり、「立場」という文末名詞については、その発生源はそれを内包する「太郎」であり、措定文における文末名詞とは異なる。そして、「立場」に前接する節は、ただ「立場」の内容を規定するだけであって、その規定に主語は不要であるので、そもそも「太郎」は節外にあると考えるのである。

次に、川島(2016)では、(32)について、「見込み」の内容は「太郎が会社を辞める」ことであるから、主題である「太郎」の属性と解することはできず、また、(33)のように、動詞「見込む」は話し手を認識主体とする述語であり、さらに(34)が示すように、(32)における「太郎は来月会社を辞める」が文相当になると捉えている。

- (33) 私は、[ 太郎は来月会社を辞める ] と見込んでいる。

- (34) [ 太郎は来月会社を辞める ] 見込みだ。(=32)

稿者は、そもそも、包摂判断や措定文の「属性を帰す」という定義とは別に、受皿語(文末名詞)の主題ネットワークからの抽出という文生成のプロセスをまったく独自に提案しているので、「立場」に限らず「見込み」も同じく属性という捉え方ではみておらず、太郎がそういった属性とは言い難い受皿語の表すものの持ち主になるのかどうかという視点から、文構造を統語的に区別することもしない。つまり、(31)を、主題が「(広義)属性の持ち主と見なす」という措定文とみなしたからこそ、両文の構造上の違いが主張されたのだらうということになるわけだが、稿者の考えでは、「～見込み」はそもそも属性ではなく要素情報として捉えるために、「太郎がそういう見込みを有する」といった格意

識を持って解釈していない。よって「見込みだ」の主語は認知主体「私」であるから、「太郎が見込みを有する」という解釈はできないからということで、太郎が「見込み」の属性の持ち主ではない（或いは「～見込みだ」は「太郎」の叙述ではなくなる）ということでもって(34)のように、「太郎」は常に節外（又は文外）にはないという解釈に至るのではなく、稿者は別の理由で、「太郎は」が節内に入ることもあれば、節外に元々「太郎」がある場合もある、という考察をしている。後述する。

「立場」はふつうは人物を指す主題からしか抽出されない受皿語であるのに対し、「見込み」は、人物、状況等いずれからでも容易に導き出されうる受皿語なだけであって、「立場」と「見込み」のこうした意味の微妙な違いをもって、統語構造上、体言締め文と文末名詞文とを対立的（並立的）に分かつ必要は特にないだろう。或いは、文末名詞自身は主語と意味論的關係にないが、修飾部と被修飾名詞が結合した「名詞句」として属性を叙述する機能を果たしているということ（川島 2016）、さらには、主語が属性の持ち主（主格主体）ではなく、したがって論理的格関係のないままに、しかし、文末名詞句が属性を叙述するという言語現象があると認定するという意味での措定文の解釈ができるなら、まさしくその点において、本稿のいう、属性を表すという措定文を越えたウナギ文を図2の名詞文の最上位に位置づける理由を立てる後ろ楯にもなり得るとは期待したい。措定文とは包摂判断を表すが、ウナギ文はそのシンプルさ故に包摂判断を超えるものである。

また、川島(2016)では、「シカ」が同一節内の否定辞としか共起できないことを使って（以下これを、便宜上「シカ・テスト」とする）、次のように主張する。これは興味深い現象だが、むしろ統一化の方向で体言締め文と文末名詞文を見ていくのに援用できる有用な知見である。

(35) \*太郎しか[子ども達の面倒を見ない立場]だ。

(36) [太郎しか来月会社を辞めない見込み]だ。

つまり、シカとナイは同一節内で共起するのであるから、(36)について、「見込み」の前接部分にシカによって主題「太郎は」から取り立てられた「太郎しか」が含まれなければならない、そうした「太郎」の節内への移動が出来ない(35)とは統語構造上の差異が認められるという指摘を行い、これを、「立場」が「太郎」の属性を表すとする(35)が措定文であるのに対して、{文相当の節+文末名詞+コピュラ}という構文（体言締め文）として別に立てたわけである。シカによって主題から取り立てられた部分とは、形式上シカがマークしているが、意味的には主体を表す主格成分に相当するのであって、もはや主題ではないことは注意しておかなければならない。後述するが、主題でなくなったシカ表示による実質上の格成分は、連体修飾節内に引き込まれてしまうので(36)のようになる。一方、「予定」に関して上述したように、(35)では、「立場」を規定し構成する要素としては連体修飾節内に引き込まれ得ない「太郎」に、節外でシカによる格の資格を「立場」の構成要素として与えることは、そもそも無理な作業であろう。ここで、受皿語（文末名詞）に来る名詞の意味・用法もまちまちであって、等質的なものが揃っていないはずはない

が、それらの語の特性からくる振る舞いの違いから、構文上のタイプを分立させるのは妥当かどうか、吟味することが必要だろう。

確かに、「立場」のような語の連体修飾節に主題が入りにくいタイプの名詞と、「見込み」のように連体修飾節に主題が入りやすい（但し上の例では厳密に言えば主題ではなく主題からシカで取り立てられたガ格相当成分）タイプの名詞による名詞文があり、措定文相当とされる前者を「文末名詞文」、後者を「体言締め文」として、統語構造上緩やかに区別するのがある程度適当だとすれば、本稿では図2において、とりあえず後者を前者の下位に分類して残し、さらに拡大述語文を後者の下位に分類するのがよいとした。

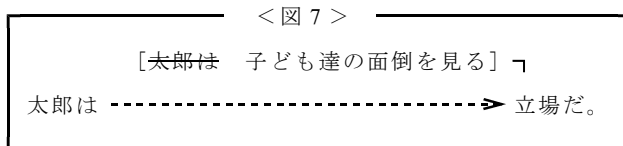
語彙の意味・特性から吟味すると、「見込み」とは、「将来についての期待できる予想。将来の可能性。将来そうなるだろうという期待」(『大辞林』)であるから、(33)の指摘のように話者を認識の主体として取るとは限らない。なぜならば「将来の可能性」は状況の中にも見い出せるからである。「有望だと思う。確かだとあてにする。予想して勘定に入れる。めあてとする」(『大辞林』)ことを意味する動詞である「見込む」とは、当然、振る舞いにおいて異なりを見せる。「見込む」は人の認識を表すものであり人を主語(主題)とする。人の中にも、状況の中にも見出され得る「将来の可能性」という意味での「見込み」と、人間の認識を表す故に人のみを主語に取る「見込む」とは等価ではない。「見込み」の場合は「見込む」とは違って、要素情報として{人}に含まれる場合と、誰かが何かをすることが期待できる予想が発生するような{状況}に含まれる場合の二通りがあってよい。

再度ふれるが、川島(2016)のシカ・テストによれば、若干構図を書き直すと(37)のように、「太郎」は連体修飾節内には入れず、これについて、措定文だから主題は節外になければならないとする考えを示しており、稿者は措定文を超えるウナギ文として捉えるので理由は異なるものの、同じく(38)のように節外に「太郎」が有らねばならないと考える。少なくともここで、{太郎はー立場だ}という構文が共通して認知されていることにはなり、本稿にとっては有用な知見となる。

(37) \*太郎しか [[子ども達の面倒を見ない] 立場] だ。(= (35))

(38) 太郎は [[子ども達の面倒を見る] 立場] だ。

これを図6に倣えば、「太郎は」が節内に含まれない図7のような構造になる。



この点では、「太郎」の位置づけに関する見方について稿者と一致する。ここで強調したいことは、本稿での独自の視点は、この構文をウナギ文(節が必須ではない点で異なるが)と同等に捉えていることであり、「ウナギ」と同様に「立場」が主題との論理的格関係がないままに受皿語として文末で「だ」と共に主題を受けており、主題「太郎」は文末

名詞にかかる連体修飾節内には含まれないことが実証されていることで、{主題-立場}という構図が裏付けられている。

川島(2016)で主張された(38)の「太郎は」が節外にあるとした論は、内容補充節とも呼ばれる連体修飾節に、「予定」の内容を補充する要素として「太郎」が含まれないと稿者が主張したことを都合良く実証していることにもなり、(25)の「予定」自体には、その者の予定であるところの「その者(太郎)」,つまりいつどこへ出かけるという人物の情報は含まれないと稿者が考察したことと平行的に捉えることができる。図7のように捉える(38)の統語構造が、まさしく文末名詞「立場」の内容補充をする連体修飾節内に、その者の立場であるとするところの「その者(太郎)」を含まないという証左になっている点で特に注目できる。

シカ・テストは節内の要素かどうかを判定するには有効だとしても、名詞文の構造において統語上の区別をして構文を分立させるほどに有効とは考えない。受皿語に由来する文末名詞の語義の違いによって構文の微妙な振る舞いを考えることでよいと考える。「立場」とは「その人が置かれている、地位・境遇・条件など」(『大辞林』)を意味する場合に、人にのみ含まれる要素情報になるので、(38)のようになると考えられる。それでもなお、用法は若干異なるが(39)のように話者を節外に置くことが可能である。シカ・テストもパスする。これは「立場」が「物の見方・考え方。見地」(『大辞林』)という意味も表すからであろう。

(39) a. 私は[太郎は子ども達の面倒を見る(べきである)という立場]だ。

b. 私は[太郎しか子ども達の面倒を見(るべきで)ないという立場]だ。

つまり、ここでは「立場」は太郎のそれではなく、認知主体・話者である「私」の見方であり、「私」から抽出される受皿語として文末の名詞に据えられる。このように文末名詞の語義の幅に応じて‘主題の置かれ方’も自在に変わり得る。認知主体を「太郎」とする場合に限っては、川島(2016)の言う措定文であり、節外に「太郎」以外の認知主体を主題として持つ構文でも、(稿者は措定文とはしないが)措定文と言われる文と同じ構造を保つことが分かる。

ここで改めて、上に見た(34)について次のように解釈することで、(38)と統語構造上の同等性(措定文としてではなく)を主張したい。主題ネットワークは「現状(で)」である。

(40) 現状(で)は[[太郎は来月会社を辞める]見込み]だ。

これはシカ・テストによっても変わらず矛盾なく、次のように、「立場」の場合と統語的な同等性が観察される。

(41) 現状(で)は[[太郎しか来月会社を辞めない]見込み]だ。

さて、しかしながら、本稿では依然として、次のような構文もあってよく、主題となる語やその位置については常に固定的にはなく、柔軟であってよいと見ている。

(42) 太郎は[[来月会社を辞める]見込み]だ。

(42)のような構文も是とするのは、この場合の「見込み」とは、依然として話者の認識を表すのみでなくてはならないのではなく、「将来の可能性」をも意味するために、要素情報としては、その「可能性」をはらむ「太郎」の中（つまり、「太郎」が連体修飾節の外にあることになるが）に含まれ得るからである。これがシカ・テストにパスする場合は、実は「見込み」が認知主体を取るのではなく、(41)のパターンになる場合であり、(42)の場合は、シカ・テストにパスしないが、それは(35)と構文を同じくするからである。「見込み」が「立場」よりも両タイプに使われやすい語義を有するが、それでも(39)のようにほぼ同じ振る舞いが観察され得ることもあると見てよいだろう。(39)の「立場」と同様に、「見込み」の連体修飾節の構成においても「太郎は」が入る場合と入らない場合があつてよいとし、日本語においては、より柔軟で自在な表現の存在の可能性をむしろ肯定的に考えたい。

受皿語に来る語の語義には意味的な幅・ずれがあり、従って、決定的な決め手となって常に必ず「太郎(は)」を連体修飾節の内か外かのどちらかに截然と決定して据えられるわけでも、そうしなければならない理由もない。

さらに他に2例加えて、「見込み」を吟味してみる。

(43) 私は[[ 個人事務所で活動できる ]見込み]だ。{認知主体が主題}

(44) 次の電車は[[ 車両故障のために遅延する ]見込み]だ。{可能性を持つ対象が主題}

これらは、主題の中に「将来の可能性」が存する場合であるが、シカ・テストがこれらに適用させられるのは、(43)(44)の主題がシカによって格成分に格下げさせられることによって、半ば必然的に、次のように、主題のポジションに新たな主題が発生しているような発話状況にある場合であつて、構文が変わり文意は変わるものの、(41)と同様の統語的構造がそこに見出し得る。

(45) 今後は[[ 私しか個人事務所で活動できない]見込み]だ。

(46) この様子では[[ 次の電車しか車両故障のために遅延しない]見込み]だ。

上に見た「立場」と「見込み」の語義による統語構造の在り様を、シカ・テストと共に整理すると、次のようになる。

## I. 「立場」

### ①「その人が置かれている、地位・境遇・条件など」の意味

太郎は[[ 子ども達の面倒を見る ]立場]だ。

→\*太郎しか[[ 子ども達の面倒を見ない ]立場]だ。

### ②「物の見方・考え方。見地」の意味

私は[[ 太郎は子ども達の面倒を見る (べきである) という ]立場]だ。

→私は[[ 太郎しか子ども達の面倒を見 (るべきで) ないという ]立場]だ。

## II. 「見込み」

### ①「将来の可能性」

太郎は[[ 来月会社を辞める ]見込み]だ。

→\* 太郎しか [[ 来月会社を辞めない ] 見込み ] だ。

② 「見た様子。みかけ。外観」(「将来の可能性」も可)

現状(で)は [[ 太郎は来月会社を辞める ] 見込み ] だ。

→現状(で)は [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] 見込み ] だ。

従って、「立場」と「見込み」はシカ・テストにパスするような統語上の構造でパラレルな振る舞いを見せており、シカ・テストにパスしないのは、上述したが、そもそも文末名詞の語義に対して適合しないような無理な操作を行うからである。文末名詞の語彙レベルでの意味の違いによって、統語構造的な分立を増やす必要はないことになるだろう。

前節と同様に、川島(2016)においては、下の(47)-(49)の統語構造を[ ]で示しつつ挙げ、「様子だ」「模様だ」「頃だ」をそれぞれ、「彼」「関東地方」「九州」に対する叙述とは見ず、特に「模様だ」を、状況の見た目を描写し報告とする認識モダリティ相当の意味を担う一形式と捉えている。つまり、内側の[ ]に当たる文相当の節に、認識モダリティ相当の意味を担う形式としての「文末名詞+だ」が下接すると分析している。[ ]の付け方は若干工夫した。

(47) [[ 彼はこの問題が分かる ] 様子 ] だ。

(48) [[ 関東地方はあす雨が降る ] 模様 ] だ。

(49) [[ 九州は桜が咲き始めた ] 頃 ] だ。

一方、本稿ではあくまで、「様子」「模様」「頃」をそれぞれ、「彼」「関東地方」「九州」を主題とすることができ、その主題から抽出される要素情報を受ける受皿語(文末名詞)であるとするのだが、ここで、そのことについてさらに考察を付け加えたい。

「様子」はまさしく「彼」の中から導き出されるものであり、「模様」は下にも述べるが、「…らしい様子」という辞書の意味の通りであって、これもまさしく「関東地方」の中に事態として存する「模様」である。「様子」は「彼が」有しているもの(彼の中に見出されるもの)、「模様」も「関東地方が」有しているもの(関東地方のうちに見出されるもの)という理屈は措定文とする場合の論理と矛盾はない。それらはいわゆる属性のようなものである。ただし、稿者は前述したが、ウナギ文をプロトタイプと考えるので、ウナギがボクの属性でないのと同じく、常に属性という捉え方をするわけではないが、属性と捉える見方で見たとしても、{文末名詞+だ}を認識モダリティ相当形式と見るよりは、これまで見てきたこととも一致するという意味である。

さて、「頃」と「九州」との関係を見た場合、若干様相が異なってくる。「九州」という土地の中には「頃」という時期は、通常含まれない、本稿で繰り返し主張してきたように、格意識を持つと固定観念で理解されてしまうので、それからはいったん解放されて改めて、さらに次に述べたい。話者が「九州」という主題を脳内で設置した時に、「九州」を中心に連結される様々な要素情報が緩やかに主題ネットワークを形成する。その中には長期記憶による「西日本」「博多」といった要素情報が連結されようが、例えば桜の話題になって今頃は桜が咲き始めたなという意識が生まれるや否や、一時的に(短期記憶とし

て)「(桜が咲き始めた)頃」が要素情報になるということである。そこに論理的格関係はない。これはまさしく、食堂に入って何を注文するかが話題になり、メニューを見た時に何と言っても鰻だなという意識が生まれるや否や、一時的に(食堂から出れば普通はもはや言うまいこととして)「ウナギ」が要素情報になるということと平行的に捉えることができるかと主張しているわけである。

そこで、この論理に立って、川島(2016)では主題を含む節が認識モダリティ相当形式に前接する構造とされた(47)-(49)を、文末に来る名詞の語義(『大辞林』を参考)に従って再解釈し、その統語構造を再構築したものを、(50b)(51b)(52b)に提示する。必要に応じて該当構文に適用する語義({ }に記入)と、それに対応する適切な主題を、シカ・テストを施した(50c)(51c)(52c)と共に並べ、検証してみる。シカ・テストを並記するのは、主題から取り出されたシカの名詞(格成分相当)が連体修飾節内に入った場合でも、文末名詞(受皿語)が主題から抽出され、連体修飾節を超えて、文末で主題からの繋がりを直接受けることを示すためである。

- (50) a. 彼はは [[ この問題が分かる ] 様子 ] だ。 { そぶり }  
 b. あの調子ではは [[ 彼はこの問題が分かる ] 様子 ] だ。 { 情勢, 兆候 }  
 c. あの調子ではは [[ 彼しかこの問題が分からない ] 様子 ] だ。 { 情勢, 兆候 }
- (51) a. 関東地方はは [[ あす雨が降る ] 模様 ] だ。 { …らしい様子 }  
 c. この分ではは [[ 関東地方はあす雨が降る ] 模様 ] だ。 { 物事の動向 }  
 c. この分ではは [[ 関東地方しかあす雨が降らない ] 模様 ] だ。 { 物事の動向 }
- (52) a. 九州はは [[ 桜が咲き始めた ] 頃 ] だ。 { 時期 }  
 c. 西日本ではは [[ 少なくとも九州は桜が咲き始めた ] 頃 ] だ。 { 時期 }  
 c. 西日本ではは [[ 九州しかまだ桜が咲き始めない ] 頃 ] だ。 { 時期 }

実際、辞書の「模様」の項目に(53a)が載せられており(統語構造を示す括弧は稿者による)、主題「会議」が節内に含まれた場合には、節外に「この分で」という主題が「模様」に先行する立ち位置ですでに設定されている。前述したように、「会議は」を節外に置く(53b)の構造も同時に本稿では柔軟な捉え方をもって認め、このように主題の位置を取り替えることは、名詞の語義さえ適合すれば、制限を強く設定するよりは自由に随意にできるとしてよいものとする。また、副詞的成分であっても「この分で」は、「こうした状況の流れにおいて」という意味を指す主題であると見る。

- (53) a. この分では [[ 会議は取り止めになる ] 模様 ] だ。(『大辞林』より)  
 b. 会議は [[ 取り止めになる ] 模様 ] だ。

さらに、興味深いことに、文末名詞文に主題を持たないものがあるということをめぐって、川島(2016)において、(54a)(55a)(56a)のような主題を取らない、従って主語が「が」でマークされる例を挙げ、例えば(54a)ならば「大臣がお見えになった」という部分が文相当の節であり、(38)の「立場だ」の場合とは区別された(34)の「見込みだ」の構文と同じく、「文末名詞+だ」が助動詞の如く下接しているという捉え方が自然である、とし

ている。その根拠を主題がないことに置いている。

しかし、本稿での捉え方では、節の主語がガ格であればむしろ文相当の節とは一層言い難くなる。これらをこれまでと同様に本稿の捉え方でみるなら、実際には顕現されずに言述することが多いとしても、主題（下線部）を設置すれば、(54b)(55b)(56b)のようになろう。シカ・テストは言うまでもなくパスする。それらも文脈は適切に変えつつも並記した(54c, 55c, 56c)。語義は必要に応じて{ }に記載した。

- (54) a. [[大臣がお見えになった]模様]だ。  
 b. 官邸前は [[大臣がお見えになった]模様]だ。 {…らしい様子}  
 c. 官邸前は [[大臣しかお見えにならなかった]模様]だ。
- (55) a. [[人手が足りないというので、私が呼ばれた]次第]だ。  
 b. この度は [[人手が足りないというので、私が呼ばれた]次第]だ。 {経緯}  
 c. この度は [[人手が足りるというので、私しか呼ばれなかった]次第]だ。
- (56) a. [[犯人を見た人がいるという]話]だ。  
 b. 警察の情報では [[犯人を見た人がいるという]話]だ。 {うわさ}  
 c. 警察の情報では [[犯人を見なかった人しかいないという]話]だ。

上の(54b)(55b)(56b)のように見ると、主題がなくガ格主語を含む節は通常の連体修飾節として捉えることに違和感はなく、これまで本稿が主張している統語構造と変わりはない。ここでも「で」等の助詞の意味を含んだ事態の経緯までをまとめて主題とみなす。さらには、(57a)のように人称制限があるものも含め、認知主体を主題に取るタイプにおいて、シカ・テストにパスしないとされた例文について検証する。

- (57) a. {私は／\*彼は} [身体が浮いている]感じだ。  
 b. {\*私しか／\*彼しか} [身体が浮いていない]感じだ。
- (58) a. {私は／彼は} [自家用車を購入する]考えだ。  
 b. {\*私しか／\*彼しか} [自家用車を購入しない]考えだ。
- (59) a. {私は／彼は} [この手術は極めて難しい]という意見だ。  
 b. {\*私しか／\*彼しか} [この手術は難しくない]という意見だ。

上のようなタイプでは、川島(2016)では、文末名詞の性格上、認知主体を主題に取らなければならないから、その認知主体を節内に含め得ない以上、(32)のような文構造と分けて「文末名詞文」とした。それと区別されるべく、文相当の節に「文末名詞+だ」が下接したものを「体言締め文」という別の統語構造として立てたわけである。本稿ではいずれもウナギ文から見れば、派生的な下位分類に挙げるものとみるので、主題が節内にあらねばならないとした場合でも、新たに節外に主題を設置することが可能だとみるところが独自の提案である。

文末名詞（受皿語）はその語義の幅に応じて、主題を取り替えることができると、むしろ柔軟に日本語を捉えた。そうすれば、以下のように、「感じ」は「そのものらしい味わいや雰囲気」（『大辞林』より）という意味の延長において、「考え」は「考えた内容」、



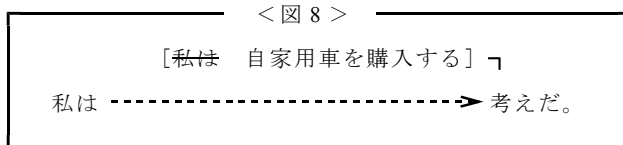
「意見」は「ある事について持っている考え」という意味において、認知主体ではない主題からも抽出される文末名詞になり得る、従って、当初は認知主体であったかもしれない主題は節内に入り得るということになる。

- (60) a. 映し出された映像(で)は[[{私は／彼は}身体が浮いている]感じ]だ。  
 b. 映し出された映像(で)は[[{私しか／彼しか}身体が浮いていない]感じ]だ。  
 (61) a. 結論(で)は[[{私は／彼は}自家用車を購入すべきという]考え]だ。  
 b. 結論(で)は[[{私しか／彼しか}自家用車を購入すべきでないという]考え]だ。  
 (62) a. 大筋(で)は[[{私は／彼は}この手術は極めて難しい]という意見]だ。  
 b. 大筋(で)は[[{私しか／彼しか}この手術は難しくない]という意見]だ。

それぞれ文意は変わるが、認知主体でない主題が節の外側であってよい、つまり、認知主体が主題でなければならぬ理由はない。先に「予定」についても見たように、基本的に「考え」には主題の主語は含まれず、或る認知主体の「考え」の内容を補充する要素は、「いつ」「何を」「どのように」「する」であって、それらによって構成された「考え」が、主題の認知主体に充てられる。その認知主体を節内に組み込む場合は格成分として下野するのであり、新たな主題が節外に立つことになる。

「考えた内容」を意味する「考え」と「(認知主体が)考える」こととは、前に「将来の可能性」を意味する「見込み」と「(認知主体が)見込む」とが異なったように、やはり、語義も用法も異なる。従って、こうしたタイプの文末名詞であっても、「認知主体の持つ認識という属性」という捉え方はいったんリセットし、あくまで、主題ネットワークに含まれる要素情報として、もっとも話者が述べたい場合に取り出し、文末で主題にただ直結するというプロセスで統一的に説明できると考えれば都合よく説明できよう。そのもっともシンプルな表れが、節を必須のものとしては伴わないウナギ文なのである。

(58)の統語構造を Tanimori(1994)の手法で表せば、図6-7と同じく図8になる。図中の節内の「私は」はふつう節内に含まれない。誰かの「考え」とは、「何をどうするか」までであって、その誰かがという補充要素はない。それが図8のように主題の人物から文末で受けることになる。このことはこれまで主張してきたように、(38)に関しても、文末名詞に帰すところの主題が節外にあることがすでに実証された。それと一致する構造である。



再び、文末名詞文に主題を持たないものがあるとされることをめぐって、下の「私(が)」自体が「考え」という広義属性の持ち主になり得るのかどうかについて見る。その場合に、もし従前の通り(63)のような統語構造を想定するのであれば、やはりシカ・テストにもパスせず、(54a)(55a)(56a)のように、ガ格主語を含む節が文相当であり、それ

に「文末名詞+だ」が下接しているという捉え方が出てこよう。

(63) a. \*私が [[ 自家用車を購入する ] 考え ] だ。

b. \*私しか [[ 自家用車を購入しない ] 考え ] だ。

さてしかしながら、上の非文から見て分かるように、実は「私が」が節内に入っていないわけではなく、その上で「私が何をどうする」という「考え」を述べることができているということであれば、すでに、それを連体修飾節として受ける文末名詞が設置できるような発話環境に置かれているということになる。つまり、主題はもはや「私」ではなく、(64a)のように、新たな主題である別人等の場合となる。「考え」は「妻」から発するが、その内容補充要素には何をどうする「私」までが登録されている。シカ・テストにもパスする。

(64) a. 妻は [[ 私が自家用車を購入する (という) ] 考え ] だ。

b. (事故に懲りた) 妻は [[ 私しか自家用車を購入しない (という) ] 考え ] だ。

主題は人物でなく状況等であってもよい。

(65) {結論(で)は/実は} [[ 私が自家用車を購入する (という) ] 考え ] だ。

このように、認知主体が主題でなければならず主題は節内に入れないから、{文相当の節+文末名詞+だ} でなければならぬと見るのではなく、図8のように、あくまで {主題- [[ (主題任意の節) + 文末名詞 ] + だ ]} と、本稿では見ている。

前述したが、主題と文末名詞との関係は、論理学の集合に含まれる要素の性質に見られる範疇的束縛はなく（「考え」という属性の持ち主は話者でなくともよい）、ボクとウナギのように、要素の範疇を越えたものどおしを自在に結びつけられるという点で根本的に異なる。

川島(2016)では、(57)(58)(59)において「感じだ」「考えだ」「意見だ」に対応する主題は、認知主体「私」「彼」でなければならないとし、そこではシカ・テストによって、その認知主体が節内に入れないために非文になるということをもって、それらの文を措定文とみなすという論の流れであった。一方、これを本稿では措定文とみなさずに、本質的にそれを越えるウナギ文に由来するとみなす点で本質的に異なることになる。

## 7. 拡大述語文をめぐって

「拡大述語」(Extended Predicate) とは、主題が顕現しない場合も多い。そこで、主題を置いて (40)(41) を拡大述語文に変換してみよう。

(66) 現状(で)は [[ 太郎は来月会社を辞める ] よう ] だ。

(67) 現状(で)は [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] よう ] だ。

川島(2016)では、拡大述語文はシカ・テストにパスすることで、「ようだ」は独立文に後ろからくっついたもの、つまり、統語構文上名詞文とは別に立てられることになる。しかし本稿では、統語構文上細分化し独立させることで本質が見えなくなりかねないということでも、文末名詞文の下位に分類し置いている。

さて、そこで、シカ・テストによれば「太郎」は連体修飾節内に収まっていると見えるが、主題「現状(で)」は節外にあり、統語構造上、{主題 [[ 節 - 文末名詞 ] + だ ]} という型は変わらず維持される。「ようだ」とは、増井(2010)によれば、語源が「様子だ」からの「子」の脱落であるという。「様子」が文末名詞として「だ」と一緒になってから「ようだ」となり、助動詞化が進んでいるとしても、まだ名詞文の形態を残しており、「子」を復元した(68)でも依然として言える。

(68) 現状は [太郎しか会社を辞めない] 様子だ。

こういったタイプについては、Tanimori(1994)においてもすでに少しくふれたが、名詞文のプロトタイプとして、同様に、「わけ」、「の」、「こと」、「もの」、「そう」、「よう／みたい」、「はず」といった「だ」と共に助動詞的用法に近づく形式が、下位分類されるべく位置づけられると見ている。プロトタイプをウナギ文とする上で、「よう」といった名詞の配置プロセスは受皿語と同じである。以下に、適切な主題を設置して、シカ・テスト(各b文)と共に検証する。主題との対応が認められよう。

(69) a. 太郎は [[ 来月会社を辞める ] わけ ] だ。

b. そういうことでは [[ 太郎は来月会社を辞める ] わけ ] だ。

c. そういうことでは [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] わけ ] だ。

(70) a. 太郎は [[ 来月会社を辞める ] の ] だ。

b. 結局は [[ 太郎は来月会社を辞める ] の ] だ。

c. 結局は [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] の ] だ。

(71) a. 太郎は [[ 来月会社を辞めるという ] こと ] だ。

b. こういう事情では [[ 太郎は来月会社を辞めるという ] こと ] だ。

c. こういう事情では [[ 太郎しか来月会社を辞めないという ] こと ] だ。

(72) a. 有能な社員は [[ 会社を辞める ] もの ] だ。

b. このご時世では [[ 有能な社員は会社を辞める ] もの ] だ。

c. 不景気では [[ 有能な社員しか会社を辞めない ] もの ] だ。

(73) a. 太郎は [[ 来月会社を辞める ] そう ] だ。

b. 噂では [[ 太郎は来月会社を辞める ] そう ] だ。

c. 噂では [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] そう ] だ。

(74) a. 太郎は [[ 来月会社を辞める ] よう ] だ。

b. あの様子では [[ 太郎は来月会社を辞める ] よう ] だ。

c. あの様子では [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] よう ] だ。

(75) a. 太郎は [[ 来月会社を辞める ] はず ] だ。

b. 確かな情報では [[ 太郎は来月会社を辞める ] はず ] だ。

c. 確かな情報では [[ 太郎しか来月会社を辞めない ] はず ] だ。

(76) a. 太郎は [[ 来月会社を辞め ] そう ] だ。

b. この調子では [[ 太郎は来月会社を辞め ] そう ] だ。

c. この調子では[[太郎しか来月会社を辞めなさ]そう]だ。

Tanimori(1994)では、基本的に「～が」の成分は受皿語に連体修飾する節内に含まれるとしているものの、各b文の構文では節が文としての性格を強めることから、「～は」が入りやすくなるが、図2において統語構文上並列的に別立てせず、下位に分類したわけである。

(76)のように、形態上は連体修飾節とは言いがたい節的な句も存在しうるが、「そう」を名詞と見なした場合は文末名詞に前接するという点で、派生した亜種としてとりあえず拡大述語文のところに下位分類する。

## 8. まとめ

本稿では、主題が無格であると捉え、その「無格の在り様」のもっとも顕著なタイプの名詞文がウナギ文であることを提案した。一般の捉え方に対して独自のものとしてはあるが、ウナギ文が日本語の名詞文の中で、一般にはもっとも優先的な立場にあるとされる措定文等よりも本質的なプロトタイプとして据えたわけである。ウナギ文における「は」が文末の「だ」に前接する名詞（受皿語又は文末名詞）との論理的格関係を伴わないままに、当たり前のこととして結び付くことを日本語名詞文の本質として捉えている。それは、もし「は」を論理的意味関係でとらえるのであれば、なぜ雑例のように言われながらも自然な主題文が成立するのかが未だ十分に解明できないといった事情があるからである。また、完全な文としてそして自由に発話できるウナギ文を二次的なものとする理由が見当たらないからでもある。

主題の「無格の在り様」とは、「は」によって主題ネットワークが脳内で形成されると、一時的なものも含め、そこに含まれることになる要素情報の内から、話者がもっとも述べたいものを抽出し文末名詞として繋げて「だ」と共に置くということだけでよいのである（図9）。

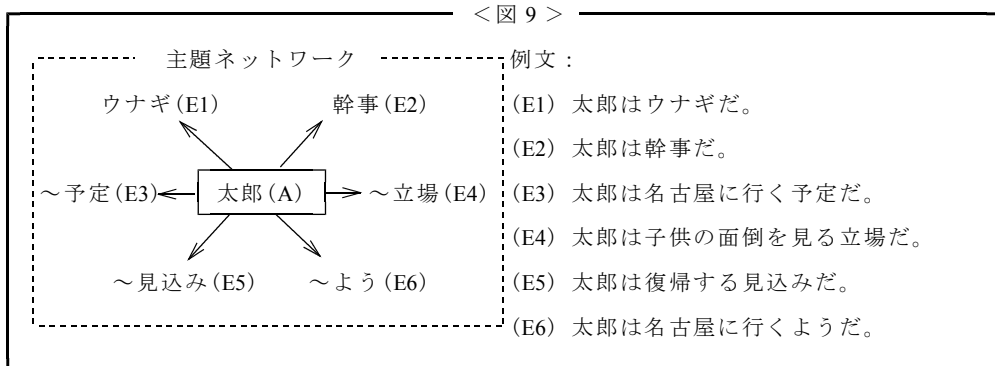


図9において要素情報は、一時的に設定されるものによるものもあれば、長期記憶によるものであってもよい。ウナギ文においては、「太郎」という主題に、食堂に入ってメ

ニューを見て注文する際にのみ有効となる短期記憶として一時的に結びつけられる「ウナギ」が選ばれると、文末名詞として据え置かれるということだけでよい。脳内では何らかの生化学的プロセスによるだろうが、主題と一時的或いは恒常的に連結される要素情報を示した。名詞に付く連体修飾節が必須の場合が、文末名詞文或いは体言締め文、さらには拡大述語文になり、文末名詞の意味・用法によって、微妙に振る舞いに差異が生じることを観察したが、基本的には、統語的構造の根幹である主題と文末名詞との関係は同じものとみて、統一的に説明できる原理を立て、名詞文の位置づけについて再構成し、そのプロトタイプであるウナギ文から無題の名詞文<sup>3</sup>までの相互関係を提案した(図2)。

主題が連体修飾節外にある場合と節内にある場合があることを観察しつつ、さらに同じ文末名詞であっても、その名詞の語義によって、主題が節内にありながら節外にも主題が設定できることを例証した。その結果、{主題-[[連体修飾節+文末名詞(受皿語)]だ]}を基本的構造とした。もっとも基本的な立場にあるウナギ文の場合は、連体修飾節は必須でないものの、文末に名詞が主題ネットワークから抽出されるというプロセスをもっともシンプルな格好で実現している。

形式上主題を持たず、ガ格主語のみが表れているように見える場合でも、連体修飾節外に主題を設定し、それによって同等の統語構造を見出し得ることを見た。

(77) 太郎は[[子ども達の面倒を見る]立場]だ。(再掲)

(77)で見たように、シカ・テストによっても、主題「太郎」が節外にあることが実証されている。これは、つまり、本稿で、文末名詞「立場」の内容補充に「太郎」は含まれないことを主張したことと一致する。文末名詞の内容補充は連体修飾節によって表されるのであるから、言い換えれば、主題「太郎」が節外にあるという稿者の主張が実証されていることになる。従って、それは、文末名詞が論理的格関係に関わらず節外の主題から抽出されていることをも含意する。その上でその表れ方を本稿で提案したわけである。ただし、節内に主題が含まれることがあってもよく、その場合でも、さらに節外に名詞文を構築する基本構造としての主題を設定できることを例証し、名詞文の基本がウナギ文に帰すことを提案してきた。

## 注)

1 澤田(2014)では、文末名詞に来る名詞として「つもり」「予定」「感じ」が突出して頻度が高いとして、文末名詞文を[[内容補充節+[名詞]]+コピーラ]という「文型」として学習させることを提案している。本稿では、節を必須としない名詞文全体を概観するため、「内容補充節」を含めた意味で便宜上「連体修飾節」とする。なお、そこに提示されている「県は、コンビニと連携して地産地消を促進する計画だ。」といった例文では、次のように、主題「県は」は、本稿で検証に援用するシカ・テストによって内容補充説に含まれないことが分かる。

\* 県しか[[コンビニと連携して地産地消を促進しない]計画]だ。

文末名詞まで係る主題は内容補充節に含まれない場合があることを認めた格好になっており、ここでも、本稿の「主題-文末名詞+だ」という統語構造が容認される格好になっている。

2 「複合述語」という呼称もあるが、複数の述語が単に同一線上で合成されたのではなく、階層的に異なるレベルで述語が拡大したと捉えて、「拡大述語文(Extended Predicate Sentence)」と呼ぶことにす

る。体言締め文と共通する構造だが、拡大部がより助動詞化しているという点で緩やかに異なるものと見る。

3 主題を欠く「火事だ」といった現象描写文としての名詞文の場合は、描写する際に主題となる「場」、つまり、火事を見た現場が主題として言語化される以前の形とはいえ、少し間を置いて「あれは火事だ」と、視覚的現場を主題として言えるように、「場」が発話（文成立）の必須の要件であることから、名詞文構成上広義の主題とし、この文を緩やかに主題文の一部として、本稿では捉えている。

## 参考文献

- (1) 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法ーダとノーー』くろしお出版。
- (2) 川島拓馬 (2016) 「『文末名詞文』の構文的位置づけ」『語文論叢』31, pp.60-43, 千葉大学文学部日本文学化学会。
- (3) 北原保雄 (1982) 『日本語の文法』中央公論社。
- (4) 佐藤里美 (2014) 「名詞文2」『日本語文法事典』大修館書店。
- (5) 澤田浩子 (2014) 「知覚・思考・判断・意志を表す『文末名詞』の使用実態ーコロケーションから文型へ」『日本語／日本語教育研究』5, pp.57-73, 日本語／日本語教育研究会。
- (6) 谷守正寛 (2006) 「『XハYガZ』文の雑例小考」『日本語の教育から研究へ』くろしお出版。
- (7) 谷守正寛 (2014) 「体言締め文における主題と文末名詞との関係について」『言語と文化』第18号, pp.157-175, 甲南大学国際言語文化センター。
- (8) TANIMORI, Masahiro (1994) A Study of the Topic of Sentences, 『日本語教育論集 世界の日本語教育』4, pp.193-208, 国際交流基金日本語国際センター。
- (9) 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題ー高橋太郎先生古希記念論集ー』鈴木泰・角田太作編, pp.139-160, ひつじ書房。
- (10) 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房。
- (11) 西山佑司 (2014) 「名詞文1」『日本語文法事典』大修館書店。
- (12) 増井金典 (2010) 『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房。
- (13) 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (復刊1972, くろしお出版)。
- (14) 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版。